

編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第40号

大阪市史料調査会（編集）

大阪市立中央図書館内 TEL06-6539-3333

●紀州の華岡流医術、大坂から全国へ

大阪が誇る江戸時代の医塾といえば緒方洪庵の適塾が有名ですが、当時適塾のライバル的存在として「合水堂」という医塾があったことをご存じでしょうか。この合水堂について、編纂所の中野操文庫に所蔵されている、合水堂の姿がわかる史料に触れながら、紹介します。

合水堂は文化13年(1816)、中之島の東端、俗に「山崎の鼻」と呼ばれる地（現在の中央公会堂付近）に創設された漢方系の医塾です。創設者は華岡鹿城という人物で、華岡青洲（1760～1835）の弟にあたります。華岡青洲は、全身麻酔薬「通仙散」を発明し、世界で初めて全身麻酔による乳がん手術に成功したことで知られています。有吉佐和子『華岡青洲の妻』では、麻酔薬の人体実験に青洲の母と妻が身を捧げる様子が描かれ、手術成功にいたる歩みの厳しさを痛感させます。

この乳がん手術の成功後、紀州にあった医塾春林軒の分塾として、合水堂が開かれたのです。開塾後程なくして、文政8年（1825）9月に出版された、大坂の医師の番付「浪花御医師見立相撲」の左・最上段に「小結 中ノシマ 花岡良平」と紹介されます。この「花岡良平」とは華岡鹿城のことです。その後鹿城の後を継いだ華岡南洋（二代目・青洲の養子）や華岡積軒（三代目・鹿城の子）も、医師番付に掲載され続けたことから、合水堂が人々の耳目を集めていたことが想像できます。

まず合水堂には、諸国から多くの学生が集まりました。華岡家に入門した門人全体の約48%が合水堂に入門していたそうですから、合水堂は華岡流外科を普及するのに、大きな役割を担っていたと言えるでしょう。

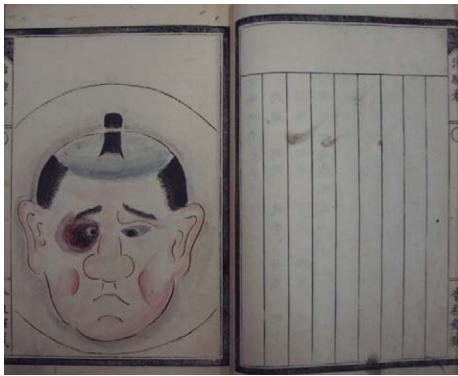
また豊かに残る華岡家の治療記録から、合水堂に多くの患者がやってきたことがうかがえます。編纂所の『合水堂治験』は、華岡南洋による治療記録で、門人西崎松伯の手になる書物です。患者の住所・氏名、症状や治療要領、処方した薬が詳細に記されています。また病状が図示されていることも特徴です。患者は大坂市中や周辺農村にとどまらず、遠く播磨国や石見国にまで及び、病状も目や口の周りの腫瘍から乳ガンなどの婦人科系の病気まで、さまざまな事例が記録されています。この『合水堂治験』をはじめとする治療記録からも、合水堂が高い医療技術を有し、隆盛を極めていたことがうかがえます。

さて合水堂は、大坂を代表する漢学塾・泊園書院とも関係しています。華岡南洋は、自分の子（青洋）



「浪花御医師見立相撲」

大阪市史編纂所蔵



『合水堂治験』 大阪市史編纂所蔵

とともに、積軒を泊園書院に入門させており、南洋・積軒の肖像画にはそれぞれ、藤澤南岳が賛を寄せています。また華岡青洲の治療記録『医学見聞録』の写本が、嘉永6年（1853）に作成されていますが、奥書に「於浪華泊園塾写之」とあります。泊園書院で華岡流の外科書が写されていたことがわかります。

確かな医療技術だけでなく、時の漢学塾との交流とも相まって、合水堂の名声が大坂から全国に轟いたのでしょう。

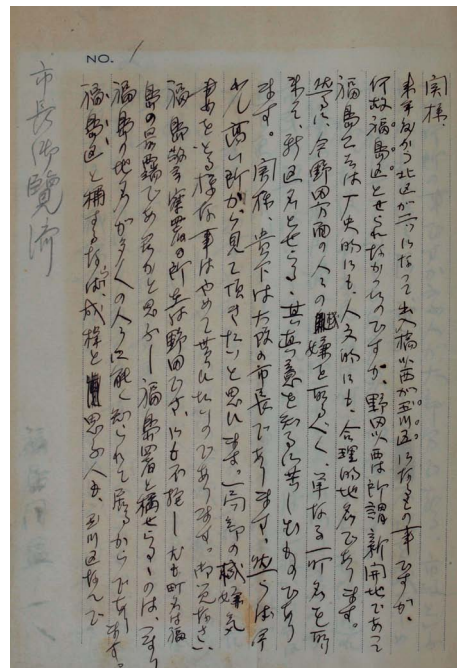
（松本 望）

※中野操文庫は、保存上の観点から一部閲覧に制限がありますが、博物館等による展示などでも公開しています。

●まぼろしの「福島区」

大正11年（1922）10月、大阪市会は東西南北の4つの区を廃止して区の数を増やすよう建議しました。明治30年（1897）の第一次市域合併を経て、各区の領域は大きくなりましたし、人口も増加を続けるなかで、区役所の事務は繁忙を極めており、施策の効果があがっていないとされたのです。この増区が実現する運びとなったのが、大正14年4月に実施された第二次市域拡張でした。西成郡・東成郡44ヶ町村を合併したことで大阪市の人口は211万人に達して日本で最大・世界でも6番目の大都市となり、面積も181km²にまで拡大しました。「大大阪」の誕生です。

市域拡張が具体化していくなかで、区の数をするかもあわせて問題になりました。大正13年11月、市長は知事に対して現行市域の4つの区を8つの区に分けたいという希望を伝えています（検甲第173号）。ここでは先の市会建議で挙げられた理由のほかに、近く普通選挙制度が実施されそうなのが理由に加えられていたことも注目されます。有権



「福島同盟ノ一人」からの投書。左上に「市長御覽前」と書かれている。

者が大幅に増加すれば「多大の混雑と渋滞とを来すへきこと、火を観るよりも明か」であって、区域を縮小し、組織を簡素化することで執務効率を高めることが目指されたのでした。市長からの申請を受け、知事は市会に区名・区域を示して、その是非を求めましたが、区の増設は行政コストを増加させるなどといった反対論も出て、議論は紛糾。知事が議論の締切とした12月10日に向けて、とりわけ市民の大きな関心と呼ぶことになったのが、北区・玉川区・東区・西区・港区・天王寺区・南区・難波区とされた区の名称でした。これらのうち難波区は浪速区に、玉川区は此花区となったのですが、大阪市公文書館に所蔵されている記録には、当時の市民から寄せられた手紙・陳情書がたくさん綴じられています。

例えば「福島同盟ノ一人」は自分の住む町が「玉川区」とされると聞いて立腹し、「野田以西は所謂新開地であって」区の名称には「歴史的にも、人文的にも合理的」地名である「福島区」にすべきであると市長に直訴しました。この手紙を書いた人からすれば、一部の町の名称を用いることが「少数有力者の機嫌」をとっているかのように見えたのです。さらに、区というものは「先祖から今日迄と、更に次代の子孫達に迄、其影響する所は甚大であります」などと実際に地域で生活す

る者の立場から再考を強く求めたのでした。この投書は実際に関一市長も目を通したことが注記されており（写真）、その効果があったかどうか…はさておき、区名をめぐって議論が続いた結果、市会で「玉川区」案は撤回され、最終的に名称は「此花区」とされました。福島区が北区・此花区・西淀川区から分離して設置されたのはアジア・太平洋戦争中の昭和18年（1943）です。

また、第二次市域拡張で新しく大阪市に含まれることになった地域には5つの区が設けられることになりました。当初の案が採用された、住吉区・東成区・住之江区は現在も残りますが、当初の案となっていた姫島区・中島区は、西淀川区・東淀川区と名称を改められました。

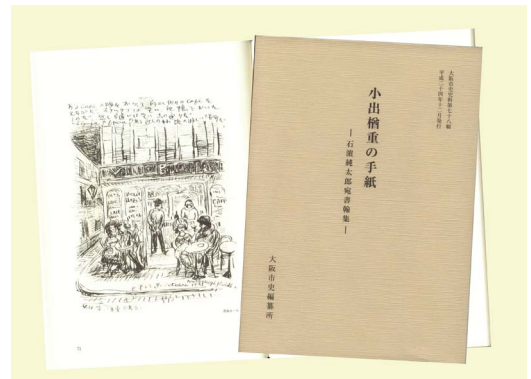
東京都のように一つの自治体として独自に議会も持つ「区」と、大阪市のような行政区としての「区」はその機能や役割も大きく異なりますが、それぞれの「区」が人々のどのような願いを受けて生まれ、市民のくらしとどう関わってきたのか、大都市のあり方が注目されるいま、あらためて立ち帰ってみたいものですね。（松岡弘之）

※本文で引用した史料はすべて『大阪市増区ニ関スル綴』（大阪市公文書館蔵・整理番号317）に収録されています。なお大阪市史編纂所では、平成25年度に大正・昭和期の市政をとりあげた『新修大阪市史 史料編』第15巻の刊行を予定しています。

～ 新刊のご案内 ～

『大阪市史史料』第78輯 小出櫓重の手紙 一石濱純太郎宛書翰集一

大阪を代表する洋画家小出櫓重が、旧制市岡中学の同級生の石濱純太郎に宛てた欧州留学中の書翰を中心に、現在知り得た全てを網羅しました。心やすい親友に宛てた書翰は自由奔放な語り口で記されていますが、古く伝統ある油絵と新しい西洋の美術をいかに取り入れ、どう克服すべきか苦悩する、大阪人らしい微妙な心のひだもくみ取れます。 1800円（本体）送料160円



『大阪の歴史』第79号



表紙は堀虎造画「道頓堀松竹座 春のおどり」。近代芸能史に関する論考を中心に、中世大阪の武士団渡辺党や近世初期大阪の地子収取にかかわる貴重史料の紹介、大坂町奉行所による訴訟手続きに関する論考を掲載しています。

700円（本体）送料160円

【掲載内容】

天野忠幸・生駒孝臣「『松雲公採集遺編類纂』所収「渡辺文書」について」

野高宏之「引合書の成立と展開」

相良真理子「大正期の道頓堀五座と菊池幽芳」

上田長生「近世初期大坂の地子収取と惣代 一新出史料の紹介」

岡本 澄「OSK日本歌劇団の九〇年」

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（市立中央図書館3階市史編纂所内・電話06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店：旭屋書店（天王寺MIO店）、ジュンク堂書店（大阪本店・千日前店・難波店）、
ミュージアムショップ文楽（大阪歴史博物館内）、紀伊國屋書店（梅田本店）

絵はがきでみる昔の大阪（18）

モダンな酒場、旗の酒場（大正8年ころ）

昭和6年（1931）に刊行を開始した、郷土研究雑誌『上方』は、昭和19年まで続いた、大阪研究にとって欠くことのできない宝庫です。主宰者の南木芳太郎は、独力ですべての運営・編集を手がけていました。大阪に関する造詣は深く、若い時から文献を収集し、その知識と交友関係をもとにして、『上方』を創刊しました。昭和初年以前の大阪のいろいろな情報が詰まっています。

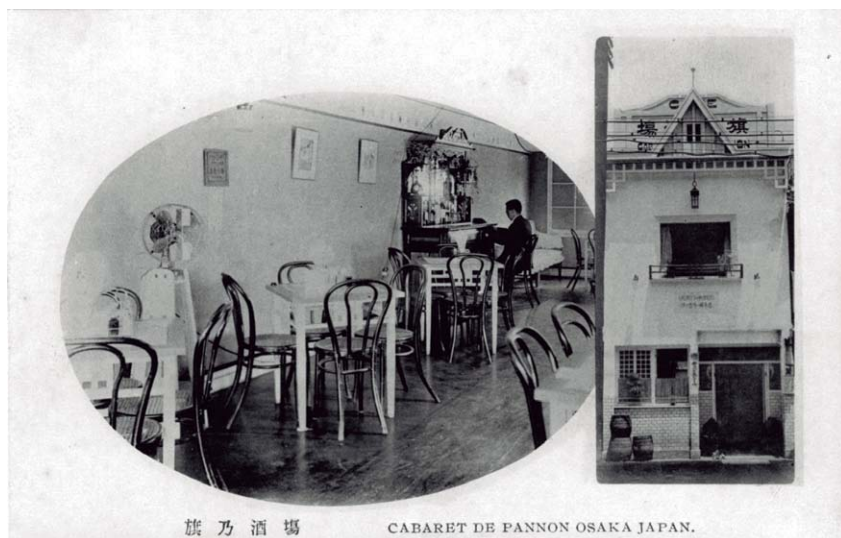
その中で、昭和7年に発行された『上方』第22号・道頓堀変遷号に、「道頓堀のカフェ黎明期を語る」という^{つるまるうめたろう}鶴丸梅太郎氏（ステンドグラス作家）の文章が掲載されています。そこに紹介されているのが、今回の絵はがき「旗の酒場」です。

鶴丸氏の文章には、大正初年、道頓堀中座の前に、「^{はくあ}白亜のセセッション風な酒場」が作られ、Cabaret De Pannon（旗の酒場）と名付けられたとあります。また「その頃の洋画家達によって装飾されたかなり凝った造りで、・・・今のカフェーと違ってレストウランを兼ね・・・在阪の画家、文士、音楽家、俳優」などが集まり、「芸術家は元より、今財界や交通界にときめく人達が二階の椅子を占めて一種の倶楽部の様」なものだったとあります。

セセッション（ゼセッション）とは、建築や工芸作品に使われた言葉で、斬新奇抜なものを表していたようです。芝居茶屋が並ぶ一角に洋風の洒落た建物ができたわけですから、目を引いたのは間違いないでしょう。

この「旗の酒場」は洋画家足立源一郎（船場出身。山岳画家）の姉夫婦が経営し、五色の層で彩られたカクテルが評判を呼びました。店員には女ボーイ（女給のこと）もおおり、客に対して上品に、行儀良くサービスをしたそうです。

酒場の雰囲気は絵はがきにあるように、ピアノやアールヌーボの椅子などがあり、モダンな店で



した。しかし、浪花座前に新館建築を始めたのをきっかけに、この店は改装されます。改装後の店は残念なことに、時代の風潮に流されて、本来の良さを失い、数年の間に人手に渡った後、消えてしまったということです。（参考：橋爪節也編著『モダン道頓堀探検』『大阪春秋』148号ほか）
（堀田暁生）

★大阪市史編纂所では、ホームページを開設し市域の歴史に関する情報を発信しています。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/> または **大阪市史** **検索** からご覧ください。

今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、催し物や刊行物を紹介する「おしらせ」、「みんなの質問」では、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問と回答を掲載しています。

編纂所だよりは9月と3月の年2回発行し、次の大阪市の施設等で配っています。大阪市の各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、大阪市市民サービスコーナー（梅田・難波・天王寺）、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムにておよそ1ヶ月間設置します。大阪市立中央図書館（3階大阪コーナー）及び各区図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。
（平成25年3月発行）